

古地磁気・岩石磁気分科会の今年度の夏の学校は「地磁気・古地磁気・岩石磁気 夏の学校 2006 in 前島」と題して、8月24～26日の3日間、岡山県瀬戸内市の沖に浮かぶ前島で行われた(幹事は岡山理科大学)。参加者は48名(うち学生が24名)で、例年の夏の学校と比べて全体的に若返った印象がある。

「若手研究者にじっくり語っていただく」というテーマのもと、6名の招待講演者(博士課程の学生・若手ポスドクなど)に、学部学生や修士課程の大学院生を対象としてわかりやすく各人の研究分野について語っていただいた。発表分野は、ダイナモ、太古代の古地磁気、テクトニクス、堆積物による環境磁気と地球化学、マントルとコアのカップリングと LOD 変動、古地磁気の地質学への応用、と多岐に渡っており、地磁気分野の広がり若手研究者が新しい学問分野しようとする強い開拓意欲を感じた。ひとりの持ち時間が1時間前後ということと、基礎の基礎からしゃべっていただくことをお願いしたこともあり、それぞれの発表者の方には自分が絡む最先端の研究の紹介までたどりつく余裕がなく非常に申し訳ないことをしたが、それぞれが非常に面白そうに話していただいたので、若い学生たちも大いに刺激を受けたのではないかと考えている。

他に8本の一般口頭発表があった。ここでは、学会ではしゃべりづらいネタ、学会発表にはまだ到らない、あるいはすでに発表してしまったがもうちょっと議論したい・伝えておきたいネタが披露されたほか、「俺にも教育させろ」という中堅研究者のレクチャーもいただくことができた。また、夜の時間を利用して参加者各人が持ち寄ったポスター紹介があり、参加者同士の交流を深めることもできた。本分科会では毎年、夏の学校のあり方に関する議論が継続してきている。それは、夏の学校が教育を重視するのか、研究者間の交流を重視するのかということである。どちらの考え方にも一理あり、現在までにこれと言った結論に到っていない。現状ではテーマの選定などは幹事校に任されている。今年は極端に前者に偏った構成をとることにした。今回の成果と反省を教訓として、次回以降の夏の学校に役立てていきたい。

また、本年のタイトルに「地磁気」を入れたのも幹事の独断である。これは従来の古地磁気・岩石磁気にとどまらずダイナモなどの地磁気全般における研究者を積極的に取り込んで生きたいという希望でもある。実際、古地磁気・岩石磁気はそれだけで成り立つ分野でなく、また、非常に広く応用されている。そのため、現分科会メンバーやその他の領域分野をひっくるめた学問名を定義することが困難である。さしあたり、共通のキーワードを1つ増やして複雑さを表現してみた。分科会名なども今後の議論の対象としたい。

[2006年夏の学校幹事：畠山唯達(岡山理科大学)]



夜の懇親会でのポスター紹介のようす